

張籍詩訳注(1)

——「野居」「西州」——

畑村 学
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (1)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

解題及び凡例

張籍(字は文昌、766?~830?)は、中唐を代表する文人であり、友人の王建と並んで、特に樂府詩に優れることで知られる。早く韓愈に師事して「韓門」の一人に数えられ、後には白居易や劉禹錫とも交流を持った。文学の集團化を特徴とするこの時代にあつて、当時の二大グループにまたがって活躍したという点で、特異な存在である。

このたび、張籍の詩の訳注を試みることにしたのは、橘は白居易・劉禹錫との関係から、畑村は韓愈との関係から張籍に関心を抱いたためである。張籍の詩の全訳注は、日本においてこれまで発表されておらず、本訳注によって、中唐文学研究の発展に資するところがあることを期待する。

張籍の詩文として伝わるものは、断片を含め、全部で四八九篇(後掲中華書局『張籍詩集』に基づく。)ある。そのうち聯句が六篇、散文が二篇残されておられ、本訳注では、これらを除く全詩に注釈を行う予定である。

訳注は、担当者が先ず草稿を作り、それに対しもう一方が意見を言うといった形でを行い、両者の検討を経て作られたものである。各詩の担当者は、詩の最後に記すことにする。

使用するテキストは、四部叢刊影印明刊本に基づく中華書局『張籍詩集』(一九五九年)である。この本には、四庫全書本、唐詩百名家本、全唐詩本など諸本との校勘がすでになされておられ、そうした便からテキストに採用することにした。その他、宋蜀刻本張文昌集・文苑英華などを用いて字句の校勘を行う。訳注の順番は、『張籍詩集』第一巻の「野居」から順次行うことにする。

すでに大陸や香港で発表されている注釈書及び年譜には以下のものがあり、訳注を作るに当たり、随時参照する。

○注釈書

- ①徐澄宇選注『張王樂府』(古典文学出版社、一九五七年)
- ②李樹政選注『張籍王建詩選』(香港三聯書店、一九八二年)
- ③李冬生注『張籍集注』(黄山書社、一九八八年)

○年譜

- ④羅聯添『唐代詩文六家年譜』(学海出版社、一九八六年)
- ①は、樂府のなかの五四首を選んで注をつけており、②は、樂府を中心に五首を取り上げる。③は張籍の詩すべてに注をつけるが、出典や人名の考証など、やや簡単すぎるくらいがある。④は年譜であり、制作年代については基本的に従うことにする。なお、これらを参照する際には、①徐注、②李樹

政注、③李冬生注、④羅氏年譜と略称を用いる。

これに加え、今回は参照することはできなかつたが、全詩に注した陳延傑注『張籍詩注』（長沙商務印書館鉛印本、一九三八年／商務印書館、一九六七年）があり、手に入り次第、参考にするつもりである。

また、語彙索引には、丸山茂編『張籍歌詩索引』（朋友書店、一九七六年）、『全唐詩索引』『張籍卷』（現代出版社、一九九四年）があり、今後も常に利用させていただくことになるであろう。

なお、張籍に関する論文は、年譜や作品を論じたものなど、国内外ですでに多数発表されているが、これについてはいわずれ改めて整理したい。

二人で目を通したものはあるが、浅学ゆえの誤りも多いことと思う。諸賢の御批正御教示を賜ることができれば幸甚である。

〔追記〕注釈書として挙げた『張王楽府』は、久留米大学の静永健氏にお借りすることができた。ここに記して御礼申し上げます。

訳注

本篇には、「野居」「西州」（ともに巻一）の訳注を掲載する。

1 野居

【題解】

「野居」は、野良住まい。この詩が詠われた時、第5句「秋田」、第6句「野水」とあるように、張籍の住居がそうした場所にあつた。「野居」の語の古い用例に、『史記』李將軍伝に、「（李）広家与故穎陰侯孫、屏野居、藍田南山中射獵」（李）広が家 故の穎陰侯の孫と、野居に屏き、藍田の南山中に射して獵す」とある。韋応物に同題の詩があり、『全唐詩』卷一九三二、役人生活を辞めた後の、隱棲の様子が詠われている。また、張籍自身に、「過賈島野居」（卷二）と題する詩があり、賈島の長安城郊外の住まいを「野居」と言っている。

羅氏の年譜には、この詩は繫年されていないが、第1句「貧賤」第14句「為客」の表現から、張籍が仕官する以前の作と推定される。張籍は、貞元十五年（799、三十四歳）に科挙進士科に登第し、その後服喪で和州（今の安徽省の地）に帰り、元和元年（806）に、初めて太常寺太祝に任せられ、長安に在住することになる。よって、この詩は、元和元年以前で、しかも服喪の期間を除いた時期に作られたと考えられる。

なお、『張籍詩集』が底本とする「四部叢刊」では、卷七所収の「古風二十七首」の最後にもこの詩が重複して載せられており、題下に「此一首当補在古風中城南後」（此の一首 当に補いて「古風」中の「城南」の後に在るべし）と、根拠は示されていないが、この詩を「古風二十七首」中の「城南」詩の次に配置するのが相応しいと注記する。テキストでは、「古風二十七首」のなかの詩を削っている。赤井益久氏の「張籍の古風二十七首」（『国学院大学大学院文学研究科論集』六、一九七九年）は、「五言古詩の「野居」「西州」「雜怨」「三原李氏園宴集」は元来二十七首の一部であったと考えられる」と述べられるが、その根拠については説明していない。

【本文・書き下し文】

- 1 貧賤易爲適 貧賤 適と爲り易く
- 2 荒郊亦安居 荒郊も 亦た安居なり
- 3 端坐無餘思 端坐して 餘思無く
- 4 彌樂古人書 弥いよ古人の書を樂しむ
- 5 秋田多良苗 秋田 良苗多く
- 6 野水多遊魚 野水 遊魚多し
- 7 我無未與網 我に未と網と無し
- 8 安得充廩廚 安んぞ廩廚を充たすを得ん
- 9 寒天白日短 寒天 白日短く
- 10 簷下煖我軀 簷下 我が軀を煖む
- 11 四肢漸寬柔 四肢 漸く寬柔なるも
- 12 中腸鬱不舒 中腸 鬱として舒びず
- 13 多病減志氣 多病にして 志氣を減じ
- 14 爲客足憂虞 客と爲りて 憂虞に足る
- 15 况復時節晚 况んや復た 時節の晩るをや
- 16 覽景獨踟躕 景を覽て 独り踟躕す

【口語訳】

- 1 貧乏暮らしは 簡単に自適できるもので
- 2 荒れ果てた野も また安らかな我が家である
- 3 じっと座って 雑念など無いため
- 4 ますます古人の書を楽しんで読んでいる
- 5 秋の田には できの良い苗が多く
- 6 野に流れる川には 泳ぎ回る魚がたくさん
- 7 しかしわたしには すきと網が無い
- 8 どうして倉庫や台所を満たすことができよう
- 9 寒空に 日の出ている時間は短く
- 10 ひさしの下で 我が体を暖める
- 11 手足はだんだん柔らかくなってきたが
- 12 気持ちには鬱屈したまま晴れない
- 13 病気がちのため 志は薄れ
- 14 旅の身であるため 憂いはつる

15 ましてや 年も暮れかかるこの季節ならなおさらだ
16 景色を眺めては 独りうろろうるするばかり

【語釈】

1・2 貧賤易爲適、荒郊亦安居

〔貧賤〕貧乏暮らし。古く『管子』牧民に、「民惡貧賤、我富貴之」(民 貧賤を惡めば、我 之を富貴にす)とある。詩の用例としては、曹植「贈徐幹」(『文選』卷二四)に、「顧念蓬室士、貧賤誠足憐」(蓬室の士を顧み念うに、貧賤 誠に憐れむに足る)とある。

〔適〕自適の意。『楚辭』九弁に、「堯舜皆有所拳任兮、故高枕而自適」(堯舜は皆拳任する所有り、故に枕を高くして自適す)とある。

〔荒郊〕荒れ果てた野原。唐代以前の用例は未見で、初唐・楊炯「和石侍御山莊」(『全唐詩』卷五〇)に、「水浸何曾吠、荒郊不復鋤」(水は何曾の吠を浸し、荒郊は 復た鋤かれず)とあるのが早い用例。

〔安居〕安らかな住まい。古くは『孟子』滕文公下に、「公孫衍、張儀豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄」(公孫衍、張儀は豈に誠の大丈夫ならざらんや。一たび怒りて諸侯懼れ、安居して天下熄む)と見える。また、丘遲「与陳伯之書」(『文選』卷四三)にも、「將軍松柏不翦、親戚安居」(將軍は松柏翦らず、親戚は安居す)とある。

なお、第2句は、四庫本では「荒郊有安居」(荒郊に安居有り)に作る。

3・4 端坐無餘思、彌樂古人書

〔端坐〕じっと座る。曹植「贈王粲」(『文選』卷二四)、端坐苦愁思、攬衣起西遊(端坐して 愁思に苦しみ、衣を攬りて 起ちて西に遊ぶ)とある。

〔餘思〕雑念の意。辞書にはこの意味で用例は挙げられていない。詩のなかで使用された古い例が見当たらず、管見では、同時代の元稹「春月」(中華書局、冀勤点校『元稹集』卷六。以下、元稹の詩文の引用はこれに拠る)に、「杳杳有餘思、行行安可忘」(杳杳として餘思有り、行き行きて 安んぞ忘るべけんや)とあるが、この場合、「余韻」というほどの意味で、二こと異

なる。同じく同時代の白居易に「餘思未足。加為六韻、重寄微士」(二三一九。本文は那波本に拠り、花房英樹氏による作品番号を記す。以下同じ)と題する詩があるが、この場合も、述べ尽くせなかつた思いを「餘思」と表現しており、張籍の詩とは意味が異なる。

〔古人書〕古人の書。具体的にどのような書物を指すのかは不明であるが、張籍には、「古人」の用例がこの他に二例見え、「寄孫冲主簿公」(卷二)では、いにしへの詩作に優れた人を指す。「新除水曹郎答白舍人見賀」(卷四)は、張籍の水部員外郎就任を白居易が祝い送ってきた詩「喜張十八博士除水部員外郎」(一一七五)に答えたもので、白居易が詩の中で、過去同じように水部員外郎の任にあり、優れた詩人であった何遜に張籍をなぞらえたことを受けて、張籍は答詩のなかで何遜を「古人」と言っている。

5・6 秋田多良苗、野水多遊魚

〔秋田〕秋の田。唐代以前の詩には用例が未見で、張籍以前では、劉長卿「送青苗鄭判官歸江西」(『全唐詩』卷一四八)に、「三苗餘古地、五稼滿秋田」(三苗 古地に餘り、五稼 秋田に滿つ)と見えるのが早い用例。

〔良苗〕できの良い苗。王粲「從軍詩五首」(『文選』卷二七)其一に、「禽獸憚為犧、良苗美已輝」(禽獸 犧と為るを憚るも、良苗 実に已に輝けり)とある。また陶淵明「癸卯歲、始春、懷古田舍二首」其二(四部叢刊本卷三。陶淵明の詩文の引用は、『文選』所収以外のものは、すべてこれに拠る)にも、「平疇交遠風、良苗亦懷新」(平疇 遠風 交わり、良苗 亦た新を懐く)とある。

〔野水〕野に流れる川。張籍が愛用した詩語のひとつで、全詩中、これを含めて五例見える。「秋田」と同じく唐代以前の詩には用例が未見で、唐代に入り、張籍以前では、孟浩然に一例、韋応物に二例、劉長卿に二例見えるが、何といっても杜甫の五例が群を抜き、張籍への影響の可能性が考えられる。杜甫「奉酬薛十二丈判官見贈」(『杜詩詳註』卷一九)以下、杜詩の引用は同書に拠る)に、「老夫自汲澗、野水日泠泠」(老夫自ら澗に汲み、野水 日び泠泠たり)とあるのがその一例。

〔遊魚〕泳ぎ回る魚。曹植「王仲宣誄」(『文選』卷五六)に、「游魚失浪、歸鳥忘棲」(游魚は浪を失い、歸鳥は棲を忘る)と見え、詩では、潘岳「河

陽渠作二首」其二(『文選』卷二六)に、「歸鴈映蘭詩、游魚動円波」(歸鴈は蘭の詩に映じ、游魚は円き波を動かす)と見える。

7・8 我無未与網、安得充廩廚

〔未与網〕土地を耕すすぎと魚を捕るための網。農耕と漁業は隠遁生活の楽しさを象徴するものとして、例えば、庾信「与從弟君苗君胄書」(『文選』卷四二)には、「而吾方欲秉耒耜於山陽、沈鉤縵於丹水」(而るに吾は方に耒耜を山陽に乗り、鉤縵を丹水に沈めんと欲す)と述べられている。

〔廩廚〕米倉と調理場。盛唐の王季友「寄韋子春」(『全唐詩』卷二五九)に、「雀鼠昼夜無、知我廚廩貧」(雀鼠 昼夜に無く、我が廚廩の貧しきを知る)と、「廚廩」の形で使われている。

9・10 寒天白日短、簷下煖我軀

〔寒天〕寒々とした空。唐代に入ってから用例が見え始める。沈佺期「隴頭水」(『全唐詩』卷九六)に、「隴山飛落葉、隴雁度寒天」(隴山 落葉飛び、隴雁 寒天を渡る)とある。また杜甫「公安県懷古詩」(『詳註』卷二二)にも、「寒天催日短、風浪与雲平」(寒天 日の短さを催し、風浪 雲と平かなり)と見え、張籍の詩と同じく、「寒天」の語が、日が短いことと併せて用いられている。張籍自身にも、「寄別者」(卷七)に、「寒天正飛雪、行人心切切」(寒天 正に飛雪あり、行人 心切切たり)と用例が見える。

〔白日短〕太陽の出ている時間が短い。

〔簷下〕ひさしの下。

〔煖我軀〕「煖」は、あたためる。「暖」に同じ。張籍「早春病中」(卷二二)に、「更憐晴日色、漸漸暖貧居」(更に憐れむ 晴日の色の、漸漸として 貧居を暖むるを)と同様の使われ方がされている。

11・12 四肢漸寛柔、中腸鬱不舒

〔四肢〕両手・両足。「四支」に同じで、古く『周易』坤卦六五文言伝に、「美在其中、而暢於四支、発於事業」(美 其の中に在りて、四支に暢び、事業

に発す」と見える。文学作品では、枚乘「七発」(『文選』卷三四)に、「今太子膚色靡曼、四支委随」(今太子 膚色靡曼たり、四支委随たり)と用例がある。また、張籍の「南帰」(卷七)にも、「促促念道路、四支不常寧」(促促として 道路を念い、四支 常に寧かならず)と用例が見える。

〔寛柔〕手足が暖まって柔らかくなること。同様の意味では用例が見当たらず、人の寛容な性格を表す意味として、古く『礼記』中庸に、「寛柔以教、不報無道、南方之強也」(寛柔にして以て教え、無道に報いざるは、南方の強なり)と見える。

〔中腸〕気持ち。前句の「四肢」が肉体を指すのに対し、精神を指す。曹植「送応氏詩二首」其二(『文選』卷二〇)に、「愛至望苦深、豈不愧中腸」(愛の至りて 望み苦だ深し、豈に中腸に愧ぢざらんや)とある。

〔鬱不舒〕気持ち鬱屈したままで晴れない。

なお、第11句「漸」は、「四部叢刊本」卷七所収「野居」は、「暫」(たちまち)に作る。

13・14 多病減志気、為客足憂虞

〔多病〕体質が病気がちであること。『史記』呉王濞伝に、「陛下多病志失、不能省察」(陛下 多病にして志を失い、省察する能わず)と、多病であることが志を失うことに結びついており、張籍のこの詩と共通する。また文学作品では、嵇康「与山巨源絶交書」(『文選』卷四三)に、「況復多病」(況んや復た多病なるをや)と用例が見える。ただ、「多病」の語が詩で用いられたい例は唐代以前にはほとんど見られず、管見では、庾信の「傷王司徒褒」(『庾子山集注』卷四)以下、庾信の詩文の引用はこれに拠る)に、「茂陵忽多病、淮陽実未痊」(茂陵 忽ち多病、淮陽 実未だ痊えず)と、王褒を「茂陵」、すなわち司馬相如になぞらえて多病とする例が見えるのみである(『漢書』司馬相如伝下に「(相如)常有消渴病」とある)。ただこの用例も、『文苑英華』卷三〇二では「移病」(病と称して官を辞すること)に作り、やや不安定な用例であると言わざるを得ない。

〔多病〕の語を、詩中で自己の体質を言う意味で多用し、張籍に多大な影響を与えたと考えられるのはやはり杜甫である。杜詩中には実に二四例この語が用いられており、これは次に多い盧綸や白居易、そして張籍が五例であ

るのと比較しても、群を抜いて多いと言ふことができよう。そして杜甫以前では、宋之問や孟浩然に、これもまた文字の異同を含む不安定な用例ながら一例ずつ見えるのみであったものが、杜甫で急激に増加し、以降、劉長卿に一例、韋応物二例、錢起一例、孟郊一例、劉禹錫一例と、中唐の詩人たちが少ないながらも継続して使用するようになっていくという特徴が見られるのである。

杜甫の用例を見ると、懐古詩である「琴臺」(『詳註』卷一〇)のなかで司馬相如について「多病」と言う一例を除き、他は全て自己の体質を直接、間接に言うものであり、張籍の五例全てが自身のことを言うのと共通している。杜甫の用例のなかで、この「野居」詩との類似が指摘できるのは、かの「登高」(『詳註』卷二〇)の、「万里悲秋常作客、百年多病独登臺」(万里悲秋常に客と作り、百年多病 独り臺に登る)という表現であろう。ここには「多病」であることと、旅の身であること(作客)が対句で詠われており、張籍の詩と類似する。さらには、後の第15句に「況復時節晚」と詠われるように、季節が秋であることが愁いをさらに募らせる要因となっていることでも共通点が指摘できる。

なお羅氏の年譜に拠れば、張籍は元和三年(808)から十一年(816)にかけて眼病を患っている。ただしその間張籍は、太常寺太祝として長安に在住しているから、この詩の制作年代とは一致せず、よってこの詩の「多病」も直接は眼病につながらない。ここでは、張籍の生まれながらの体質と考える方が妥当であろう。

〔志気〕こころざし。古く『莊子』盗跖に見えるが、文学作品としては、嵇康「与山巨源絶交書」(『文選』卷四三)に、「志气所託、不可奪也」(志気の託する所、奪うべからざるなり)とある。張籍「贈姚怱」(卷七)にも、「君今職下位、志气安得揚」(君今 職は下位、志気 安んぞ揚がるを得んや)と見える。

〔憂虞〕憂い。「憂」「虞」ともにうれしいの意。古く『周易』繫辭上に、「悔吝者、憂虞之象也」(悔吝は、憂虞の象なり)と見える。詩では、嵇康「答二郭詩三首」其三(『嵇康集校注』卷一)嵇康の詩文の引用は、『文選』所収のもの以外は、すべてこれに拠る)に、「詳觀凌世務、屯險多憂虞」(凌たる世務を詳観すれば、屯険にして 憂虞多し)とあり、また杜甫「北征」(『詳註』卷五)にも、「乾坤含瘡痍、憂虞何時畢」(乾坤 瘡痍を含む、憂虞 何れの時にか畢らん)と用例が見える。

15・16 況復時節晚、覽景独脚躡

〔時節〕季節。「古詩十九首」其七（『文選』卷二十九）に、「白露沾野草、時節忽復易」（白露は野草を沾し、時節は忽ち復た易れり）とある。

〔覽景〕景色を眺める。用例は未見。「四部叢刊」卷七所収の詩は、「覽物」に作る。意味は「覽景」に同じであるが、こちらであれば詩に類見し、早くは謝靈運が愛用した詩語で、「於南山往北山經湖中瞻眺」（『文選』卷二二）に、「撫化心無厭、覽物眷弥重」（化を撫して、心は厭くこと無く、物を覽て眷ること弥いよ重し）など見える。

〔脚躡〕徘徊して前に進まないさま。『毛詩』に「脚躡」の形で見え、邶風「静女」に、「愛而不見、搔首脚躡」（愛すれども見えず、首を搔きて脚躡す）とある。張籍「夏日可畏」（卷三）にも、「如何倦遊子、中路独脚躡」（如何ぞ、倦遊の子の、中路に独り脚躡するを）とある。

第15句は、『全唐詩』では「況復苦時節」（況んや復た時節に苦しむをや）に作る。また、第16句は、「四部叢刊」卷七所収の詩では「覽物空脚躡」（物を覽て、空しく脚躡す）に作る。

【補】

この詩は、第6句までは「野居」での生活を満喫する閑適の心境が詠われ、第7句以降では、そうした生活に対する憂いが詠われており、一首の詩のなかで、詩人の心境に曲折が見られる。

後半の憂いをもたらした直接の原因は、第7句に「我に未と網と無し」とあるように、農耕や漁業をする道具がないことによる貧困であり、それに多病の体質や、旅の身という境遇が加わって、憂いを更に増長させている。しかし、農具や漁具があったとしても、この憂いは解消されるものではない。この詩が、仕官前の作である可能性は、すでに【題解】で述べた通りであるが、知識人として、科擧に合格して政治に参与し、経世の才を発揮することこそが目標であり、現在それがかなわぬからこそ貧困を余儀なくされ、憂えているのではあるまいか。

【注】

①「古風二十七首」の詩で、その他の巻に重複して載せられているもの、すなわち「和李僕射西園」「岸花」「野草」「秋山」「山禽」も、「野居」と同様に、『張籍詩集』ではすべて削られている。

②「輝」はもと「揮」に作るが、李善注「揮、当為輝」に従い改めた。

③「詩」はもと「時」に作るが、胡克家『文選考異』に拠り改めた。

（畑村）

2 西州

【題解】

「西州」は州の名。唐の武徳四年（621）高昌を平定してその地を西州とした。天宝元年（742）、交河郡と改め、乾元元年（758）、西州に復した。漢の車師前王庭の地。現在の新疆ウイグル自治区吐魯番県と鄯善県の地。貞元七年（791）以後は吐蕃（チベット族）の地となった。

この詩は、異民族に支配された西州を舞台にした辺塞詩である。「西州」ということば自体は、唐詩の中では、単に西方の州という意味で用いられた。謝安の死後羊曇が西州門を通らなかつたという故事によって用いられることがほとんどで、辺塞詩の舞台としてこのことばが選ばれることはほとんどなかつたようである。張籍のもう一例「送元宗簡」（卷六）も、京師の西に当たる岐州を「西州」と呼んでいる。

単に西の州という意味で用いられている可能性もあるが、ここでは固有名詞として解釈した。異民族との戦いを描いた作品で「西州」といえば、唐代の人々にはやはり固有名詞としての西州が意識されるであろうと考えたからである。李冬生注も固有名詞として解釈している。

なお、別名の「交河」は、岑参に八例の用例が見え、杜甫の「前出塞九首」其一（『詳註』卷二）にも「威威去故里、悠悠赴交河」（威威として、故里を去り、悠悠として、交河に赴く）という句が見えるなど、辺塞詩に多く用いられている。「交河」は張籍には用例がないが、同時代の白居易の新樂府「縛戎人」（二四四）などにも見えている。

なお、ウイグル族の一部が天山山脈を越えて西州に国家を形成し、「西州回鶻」と呼ばれて有名であるが、これは唐の開成五年（840）のウイグル王国崩壊以後のことで、張籍の死後になる。

【本文・書き下し文】

- 1 羌胡據西州 羌胡きやうこ 西州せいしゅうに拠より
- 2 近甸無邊城 近甸きんけんに 邊城へんじやう無し
- 3 山東收稅租 山東さんとう 稅租ぜいそを收せめ
- 4 養我防塞兵 我わがが防塞ぼうさいの兵へいを養やうう
- 5 胡騎來無時 胡騎こき 來きるに時とき無く
- 6 居人常震驚 居人きよじん 常つねに震しん驚きやうす
- 7 嗟我五陵間 嗟ああ 我わがが五陵ごりやうの間ま
- 8 農者罷耘耕 農者のうしや 罷や耘えん耕かうむ
- 9 邊頭多煞傷 邊頭へんとう 多おほく 煞傷さつじやう
- 10 士卒難全形 士卒しそ 形かたちを全まもうし難がたし
- 11 郡縣發丁役 郡縣ぐんけん 丁役ていやくを發はし
- 12 丈夫各征行 丈夫ちゆうぶ 各おのの征行ていかうす
- 13 生男不能養 生男せいなん 不あ能あ養やう
- 14 懼身有姓名 懼おそ身みに姓せい名な有あるを懼おそむ
- 15 良馬不念秣 良馬りやうば 不あ念あ秣まき
- 16 烈士不苟營 烈士れつし 不あ苟あ營えいせず
- 17 所願除國難 願ねがう所ところは 國難こくなんを除のぞき
- 18 再逢天下平 再また逢あう天あま下かみの平へいらかなるに逢あわんことを

【口語訳】

- 1 西方の異民族どもは 西州を拠点としており
- 2 その近郊には 我が前線基地となる城市がない
- 3 山東の地が 税金を徴収して
- 4 我らの辺境防衛軍を養っている
- 5 えびすの騎兵隊は 時を選ばず攻めてきて
- 6 住民たちは いつも驚くばかり
- 7 ああ 我が五陵のあたりでも
- 8 農民たちは 農作業をやめてしまった
- 9 辺地では やたらと傷つけ殺し合い
- 10 兵士たちは 無傷ではいられない
- 11 国じゅうの郡や県が 兵士たちを集め
- 12 一人前の男は それぞれ従軍している
- 13 男の子を生んでも 育て上げることはできない

- 14 自分の名前が 徴兵名簿にあることを恐れているのだ
- 15 よい馬は 飼葉のことに意を介さず
- 16 気概のある男は 一時的な私利をもとめないもの
- 17 願うことといえば 国の難儀を救って
- 18 ふたたび天下太平の世の中に逢うことなのだ

【語釈】

1・2 羌胡拋西州、近甸無辺城
 「羌胡」西方の異民族を指している。ここでは吐蕃すなわちチベット族をいう。「後漢書」西羌伝「東号麻奴」の条に、「羌胡斬琦者、賜金百斤、銀二百斤」(羌胡の(杜)琦を斬る者は、金百斤、銀二百斤を賜う)という。詩においては、左思の「詠史八首」其一(『文選』卷二一)に「左眊澄江湘、右盼定羌胡」(左眊しては 江湘を澄ましめ、右盼しては 羌胡を定めん)という句がある。

「拋西州」「西州」は【題解】参照。吐蕃が西州を拠点にしているというのである。

「近甸」都城の近郊を指す。甸は都城の郊外をいう。「春秋」襄公二十一年の「左伝」に「将逃罪、罪重於郊甸」(将に罪を逃れんとし、罪は郊甸に重なる)とあり、杜預の注に「郭外曰郊、郊外曰甸」(郭外を郊と曰い、郊外を甸と曰う)という。

『晋書』食貨志に「此又三魏近甸、歲当復入数十万斛穀」(此れ又た三魏の近甸にして、歳ごとに当に復た数十万斛の穀を入るべし)と有り、張九齡の「奉和吏部崔尚書雨後大明朝堂望南山」(『全唐詩』卷四九)に「林華鋪近甸、煙靄遠晴川」(林華 近甸に鋪き、煙靄 晴川を遠る)の句があり、顧況の「樂府」(『全唐詩』卷二六六)にも、「暖谷春光至、宸遊近甸榮」(暖谷春光至り、宸遊 近甸の榮なり)の句がある。以上の用例からすると都の近郊をいうのが普通のようなのであるが、「都の近郊に辺境の城がない」というのは、当然のことであるように思われる。ここでは、「羌胡」の側から根拠地である西州の近郊をいうものとして解釈した。

〔無辺城〕「辺城」は辺境地帯の城市。『管子』度地に「当冬三月、天地閉蔵、暑雨止、大寒起、万物実熟、利以填塞空郊、繕辺城、塗郭術、平度量、正權衡、虚牢獄、實廩倉」(冬三月に当たり、天地 閉蔵し、暑雨 止み、大寒

起こり、万物 実熟し、以て空邨を填塞し、辺城を繕い、郭術を塗り、度量を平らかにし、権衡を正し、牢獄を虚しくし、廩倉を実すに利あり」という。

詩においてもよく用いられ、例えば岑参の「胡笳歌送顔真卿使河隴」（上海古籍出版社『岑参集校注』卷一。以下、岑参の詩文の引用は同書に拠る）に「辺城夜夜多愁夢、向月胡笳誰喜聞」（辺城夜夜 愁夢多し、月に向かい胡笳 誰か聞くを喜ばん）の句があり、杜甫の「送高三十五書記十五韻」（『詳註』卷二）にも「辺城有餘力、早寄從軍詩」（辺城 餘力有らば、早く寄せよ 從軍の詩）というなど、辺境地帯の景物として詠ぜられる。

この「辺城」は唐王朝の側から辺境地帯をいうのであろうか。すなわちこの句は、「羌胡」の根拠地である西州の付近には、唐の前線基地となる辺境の城市がないことをいうのであろう。

なお、「無」の文字を「為」に作るテキストもあるが、そうであれば、都の近くまで辺塞のようになっていくという意味になり、戦争が都のすぐ近くで行われていることを誇張的に表現していることになる。

冒頭の二句。唐王朝と吐蕃の緊張関係を大づかみに表現して舞台設定がなされ、詩が歌い起こされる。

3・4 山東收税租、養我防塞兵

〔山東〕太行山以東を指すこともあるが、ここでは華山あるいは崤山以東の地、すなわち關東をいうのであろう。戦国時代には秦以外の六国の地をも指し、漢民族の居住地という意味合いを帯びたことばである。『戦国策』趙策二に「六国從親以擯秦、秦必不敢出兵於函谷關、以害山東矣」（六国從親して以つて秦を擯げば、秦 必ず敢えて兵を函谷關に出し、以て山東を害せざらん）という。詩においても鮑照の「教詩」（『文選』卷三〇）に「一身仕關西、家族滿山東」（一身 關西に仕え、家族 山東に滿つ）の句がある。

〔收税租〕「税租」は租税のこと。『管子』立政に「国之所以富貧者五、輕税租、薄賦斂、不足恃也」（国の富貧なる所以の者は五あり、税租を軽くし、賦斂を薄くするは、恃むに足らざるなり）という。

〔養我防塞兵〕「塞」は音ソク（入声）の場合ふさぐ・ふせぐの意、音サイ（去声）の場合とりでの意。『漢書』谷永伝に「敕勸耕桑、母奪農時、以慰綏元元之心、防塞大姦之隙」（敕して耕桑を勧め、農時を奪う母く、以て元

元の心を慰綏し、大姦の隙を防塞せしむ）というのはソクの音で、ふせぎ守る意。ここではそれに基づいて解釈したが、あるいはとりでを守るの意かもしれない。

前の二句の舞台設定を承けて、唐王朝が国の財政を傾けて辺境の守備兵を養うことをいう二句。

5・6 胡騎來無時、居人常震驚

〔胡騎〕異民族の騎兵。『史記』絳侯周勃世家に「以前至武泉、擊胡騎、破之武泉北」（以て前んで武泉に至り、胡騎を撃ち、之を武泉の北に破る）という。杜甫の「哀江頭」（『詳註』卷四）に「黄昏胡騎塵滿城、欲往城南望城北」（黄昏胡騎 塵城に滿ち、城南に往かんと欲して城北を望む）といい、「前出塞九首」其五（前出）にも「隔河見胡騎、倏忽數百群」（河を隔てて胡騎を見る、倏忽として 數百群）という。

〔來無時〕「無時」は時を選ばないこと。『儀禮』既夕礼に「哭晝夜無時」（哭するに晝夜時無し）とあり、鄭玄の注に「哀至則哭、非必朝夕」（哀至れば則ち哭し、必ずしも朝夕に非ず）という。詩においては、杜甫の「三川觀水漲二十韻」（『詳註』卷四）に「火雲出無時、飛電常在目」（火雲 出づるに時無く、飛電 常に目に在り）といい、「前出塞九首」其二（前出）にも「骨肉恩豈斷、男兒死無時」（骨肉 恩 豈に断たんや、男兒 死するに時無し）の句がある。

〔居人〕住人。『毛詩』鄭風「叔于田」に「叔于田、巷無居人」（叔 于きて田す、巷に居人無し）といい、鮑照の「東門行」（『文選』卷二八）に「居人掩閨臥、行子夜中飯」（居人は閨を掩いて臥すも、行子は夜中に飯う）という。

〔常震驚〕『尚書』舜典に「朕聖讒說殄行、震驚朕師」（朕 讒說の行いを殄ち、朕が師を震驚するを望む）といい、『毛詩』大雅「常武」にも「徐方釋駭、震驚徐方、如雷如霆、徐方震驚」（徐方釋駭し、徐方を震驚す、雷の如く霆の如く、徐方震驚す）という。

この二句では、吐蕃の軍の侵入におびえる「西州」の住民の姿が描かれる。以上までがおおよその状況を説明した部分であるといえる。

7・8 嗟我五陵間、農者罷耘耕

〔嗟我五陵間〕漢の高帝以下五人の皇帝の陵墓。長陵（高帝）・安陵（惠帝）・陽陵（景帝）・茂陵（武帝）・平陵（昭帝）をいう。長安の近郊。付近に豪族や外戚を住まわせたため、豪族や遊俠の人の住む場所として詩文によく用いられる。『漢書』遊俠伝の原渉の伝に「郡国諸豪及長安五陵諸為氣節者、皆帰之」（郡国の諸豪及び長安五陵の諸の氣節を為す者、皆之に帰す）とあり、顔師古の注に、「五陵、謂長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵也」（五陵は、長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵を謂うなり）という。

徐陵の『玉臺新詠』序にも「其人也、五陵豪族、充選掖庭、四姓良家、馳名永巷」（其の人や、五陵の豪族にして、掖庭に充選せられ、四姓の良家にして、名を永巷に馳す）と、豪族の居住地として用いられ、李白の有名な「少年行二首」其二（中華書局、王琦注『李太白全集』卷六。以下、李白の詩の引用は同書に拠る）でも「五陵年少金市東、銀鞍白馬度春風」（五陵の年少金市の東、銀鞍白馬 春風を度る）と、遊俠少年の出身地として用いられる。

ここでは、「我五陵間」といっており、この詩の主人公がこの五陵の出身遊俠少年であることが明らかにされる。

なお、詩中で用いられる「五陵」について、植木久行氏に、「詩語「五陵」考——地名の多義的用法をめぐって——」（『古田教授退官記念中国文学語学論集』、東方書店、一九八五年）がある。

〔農者〕農民。用例のあまり見当たらないことばで、張籍もこの一例のみ。

同時代の白居易に、「村居苦寒詩」（四六）に「乃知大寒歲、農者尤苦辛」（乃ち知る 大寒の歳、農者 尤も苦辛するを）という他、一例が見える。

〔罷耘耕〕「耘耕」は耕耘に同じ。耕すこと。『韓非子』外儲説左上に「庸客致力而疾耘耕者、尽巧而正畦陌畦畦者、非愛主人也」（庸客の力を致して疾く耘耕し、巧みを尽くして畦陌畦畦を正すは、主人を愛するに非ざるなり）という。

主人公が明らかにになり、農民が農耕をやめることが述べられた二句。農民が農耕をやめる理由は、以下の句に語られる。すなわち、結局徴兵されてしまうから、働いていてもしょうがないというのである。

9・10 辺頭多熬傷、士卒難全形

〔辺頭〕辺地・辺境のこと。頭は接尾辞。王昌齡「塞下曲四首」其四（『全唐詩』卷一四〇）に「辺頭何慘慘、已葬霍將軍」（辺頭 何ぞ慘慘たる、已に霍將軍を葬る）の句がある。

〔多熬傷〕「熬」は「殺」に同じ。「熬傷」は「殺傷」、殺し傷つけること。『墨子』脩身に「殺傷人之孩、無存之心」（人を殺傷するの孩、之を心に存する無し）いい、『史記』衛將軍驃騎列傳に「時已昏、漢匈奴相紛拏、殺傷大当」（時已に昏く、漢匈奴相い紛拏し、殺傷大よそ当たる）という。杜甫の「前出塞九首」其六（前出）にも「苟能制侵陵、豈在多殺傷」（苟くも能く侵陵を制せば、豈に多く殺傷するに在らんや）という句がある。

〔士卒〕兵士をいう。『戦国策』東周に「凡一鼎而九万人輓之、九九八十一万人、士卒師徒、器械被具、所以備者称此」（凡そ一鼎にして九万人 之を輓き、九九八十一万人、士卒師徒、器械被具、備うる所以の者 此に称えり）といい、『孫子』計に「主孰有道、將孰有能、天地孰得、法令孰行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明」（主 孰れか道有る、將 孰れか能有る、天地 孰れか得たる、法令 孰れか行わる、兵衆 孰れか強き、士卒 孰れか練れる、賞罰 孰れか明らかなる）という。司馬遷の「報任少卿書」（『文選』卷四一）では「転闘千里、矢尽道窮、救兵不至、士卒死傷如積」（転闘すること千里、矢は尽き道は窮まりて、救兵至らず、士卒の死傷すること積むが如し）と、「殺傷」ではないが「死傷」とともに用いている。

〔難全形〕「全形」は形すなわち肉体を全うすること。『亢倉子』全道に、「亢倉子曰、全汝形、抱汝生、无使汝思慮營營」（亢倉子曰く、汝の形を全うし、汝の生を抱き、汝の思慮をして営營たらしむる无れ）といい、孫綽「喻道論」（『弘明集』三）に「昔仏為太子、棄國學道、欲全形以遁」（昔 仏 太子たるも、國を棄てて道を学ばんとし、形を全うして以て遁れんと欲す）という。「難全形」というのは、体を傷つけずにはいられないということで、戦乱の激しさをいう。

11・12 郡県発丁役、丈夫各征行

〔郡県〕郡と県。周にも郡県の区分はあったが、制度として州―郡―県制が確立されたのは始皇帝の時からである。『史記』秦始皇本紀にも「今陛下興

義兵、誅残賊、平定天下、海内為郡県、法令由一統」(今陛下 義兵を興こし、残賊を誅し、天下を平定し、海内 郡県と為り、法令 一統に由る)など関連した記述が見える。唐では郡を廃して州県制としているが、ここではそういった区別が問題にされているわけではあるまい。「全国各地から」ということであろう。

〔発丁役〕「丁役」は役に当てられる壮丁、すなわち徴兵される成年男子をいい、また壮丁に課せられる労役をいう。『唐律』名例三「徒役無兼丁」の『疏義』に「其残疾既免丁役、亦非兼丁之限」(其の残疾にして既に丁役を免れ、亦た兼丁の限りに非ず)とある。詩における用例は未見、張籍にもこの一例のみ。

〔丈夫〕一人前の男、りっぱなおのこ。『周易』随の六二の爻辞に「係小子、失丈夫」(小子に係れば、丈夫を失う)といい、『孟子』滕文公上に「彼丈夫也、我丈夫也、吾何畏彼哉」(彼も丈夫なり、我も丈夫なり、吾 何ぞ彼を畏れんや)という。

〔各征行〕征伐に出かけること。『三国志』魏書・曹真伝に、「(曹)真每征行、与士卒同劳苦」(曹)真征行する毎に、士卒と労苦を同じくす」といい、何晏の「景福殿賦」(『文選』卷一一)に「惟岷越之不静、寤征行之未寧」(惟れ岷越の静かならざる、征行の未だ寧からざるを寤る)という。詩における例には、杜甫の「清明」(『詳註』卷二二)に「馬援征行在眼前、葛強親近同心事」(馬援の征行 眼前に在り、葛強の親近 心事同じ)の句がある。

引き続き農民たちの心境が語られる。兵士になる苦勞をいう部分である。

13・14 生男不能養、懼身有姓名

〔生男不能養〕男の子を産んでも養うことができない。徴兵され、戦場の露と消えるからである。陳琳の「飲馬長城窟行」(『玉臺新詠』卷一)に「生男慎莫舉、生女哺用脯」(男を生むも慎んで挙ぐる莫れ、女を生まば哺するに脯を用つてせよ)といい、杜甫の「兵車行」(『詳註』卷二)にも「信知生男惡、反是生女好、生女猶得嫁比隣、生男埋沒隨百草」(信に知る 男を生むは悪く、反つて是れ 女を生むは好きを、女を生めば猶お比隣に嫁するを得、男を生めば埋没して百草に隨う)という。

〔懼身有姓名〕「姓名」は氏名、名前。『孫子』用間に「必先知其守將・左右・謁者・門者・舍人之姓名、令吾間必索知之」(必ず先ず其の守將・左右・謁者・門者・舍人の姓名を知り、吾が間をして必ず之を索せしむ)といい、曹丕の「与吳質書」(『文選』卷四一)に「觀其姓名、已為鬼錄」(其の姓名を觀れば、已に鬼録と為る)という。

この句、自分に姓名があることを恐れるといっているが、これは、李冬生注にいうように徴兵のことを述べるのであろう。徴兵の名簿に自分の名前が載っているのをおそれるのである。

李冬生注に述べられるように、隋唐の兵役制度は、一つは府兵制であり、もう一つは府兵制が崩壊した後の募兵制であった。この府兵制は、戸籍に登録されている人民の中から徴兵し、その間の租庸調を免除するものであったが、唐代中期には廃止されて、職業軍人を募集する募兵制に変わった。張籍の時期には募兵制が中心であったようだが、文学作品の中の表現であるから、歴史的事実と符合しない場合もありえよう。

徴兵を恐れる農民の心境。この詩の主人公である「五陵」の少年「烈士」はこのような一般的な人民とはことなり、武功を立てようという強い望みを抱いている。その心情が最後の四句で描かれる。

15・16 良馬不念秣、烈士不苟當

〔良馬〕『周易』大畜の九三の爻辞に「良馬逐、利艱貞、日閑輿衛、利有攸往」(良馬逐う、艱みて貞しきに利し、輿衛を閑すと曰うも、往く攸有るに利し)といい、『毛詩』鄘風「干旄」に「素糸紕之、良馬四之」(素糸之を紕す、良馬 之を四とす)という。曹丕の「善哉行」(『文選』卷二七)に「策我良馬、被我輕裘、載馳載驅、聊以忘憂」(我が良馬に策ち、我が輕裘を被て、載ち馳せ載ち驅り、聊か以て憂いを忘れん)という。

〔不念秣〕「秣」はまぐさ。よい馬はまぐさのことばかり考えないというのである。次の「烈士」の句の比喩となっている。

〔烈士〕『莊子』秋水に「白刃交於前、視死若生者、烈士之勇也」(白刃前に交わりて、死を視ること生の若きは、烈士の勇なり)といい、『史記』伯夷列伝に「貪夫徇財、烈士徇名、夸者死權、衆庶馮生」(貪夫は財に徇い、烈士は名に徇い、夸者は權に死し、衆庶は生に馮る)という。曹操の「步出夏門行」(『樂府詩集』卷三七)にも、「驥老伏櫪、志在千里、烈士慕年、壯

心不已(驥老いて櫪に伏すも、志は千里に在り、烈士慕年、壮心 已まず) という有名な句がある。

〔不苟營〕「苟營」は用例が見当たらない。李冬生注によれば「苟且營私」、一時的に私利をはかるの意。

私利を去り、国のために働こうという姿が、良馬の比喩を借りて、対句によって表現される。その心情がもつとはつきりとした形で詠じられるのが、結びの二句であり、この二句はそれを引き出す働きをしている。

17・18 所願除国難、再逢天下平

〔所願〕願い。『孟子』公孫丑上に「皆古聖人也、吾未能有行焉、乃所願則学孔子也」(皆 古の聖人なり、吾未だ行う有る能わず、乃ち願う所は則ち孔子に学ばん) といい、陶淵明の「閑情賦」(四部叢刊本卷六)に「考所願而必違、徒契契以苦心」(願う所を考うるに必ず違ひ、徒らに契契として以て心を苦しましむ) という。

〔除国難〕『漢書』翟方進伝に「方今宗室衰弱、外無強蕃、天下傾首服従、莫能亢扞国難」(方今 宗室衰弱し、外に強蕃無く、天下は傾首して服従し、能く国難に亢扞する莫し) という。曹植の「白馬篇」(『文選』卷二七)の結びに「名編壯士籍、不得中顧私、捐軀赴国難、視死忽如帰」(名は壯士の籍に編せられ、中に私を顧るを得ず、軀を捐て国難に赴き、死を視ること忽として帰するが如し) というのは、この詩と似た心情を詠じている。

〔再逢天下平〕『礼記』大学に「物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、心正而后身脩、身脩而后家斉、家斉而后国治、国治而后天下平」(物格りて后に知至る、知至りて后に意誠なり、意誠にして后に心正し、心正しくして后に身脩まる、身脩まりて后に家斉う、家斉いて后に国治まる、国治まりて后に天下平らかなり) の有名な文章がある。

私欲を離れ国難に赴こうという「烈士」の心意気が、極めて直截に詠じられた結びの二句。先に引いた曹植の「白馬篇」の他、鮑照の「出自薊北門行」(『文選』卷二八)の結び「時危見臣節、世乱知忠良。投軀報明主、身死為国殤」(時危くして 臣節を見、世乱れて 忠良を知る。軀を投じて 明主に報い、身死して 国殤と為らん) など、多くの樂府詩や辺塞詩に見られる、

常套的な表現であるといえる。

【補】

樂府題には「西州」というのはないようである。『樂府詩集』にもこの詩は採られていない。『樂府詩集』卷七二雜曲歌辭に「西洲曲」はあるが、男女の恋愛の情について詠じたもので、温庭筠の同題の樂府も恋愛をテーマとしたものである。この詩とは切り離して考えた方がよいようだ。

ただ内容は、武功を立てて国難を救いたいという遊俠少年の思いを詠じたもので、「結客少年場行」などの樂府の流れに位置づけられる作品といえよう。

全体の構成としては、第1〜6句、異民族と戦乱状態にあることを述べて場面を設定し、第7〜14句、農民が戦乱を恐れて耕作をやめた状況を述べ、第15〜18句、主人公の気概を詠じて結んでいる。

表現面に着目すると、全体的に杜甫に基づいた表現が多く、特に第7〜14句の部分は最も杜甫に学んだところといえるだろう。張籍は杜甫を尊敬し、杜甫の詩の灰を飲んであやかろうとしたというエピソードまで語られている(『雲仙雜記』)。張籍の杜甫に対する傾倒をよく示した作品といえるのではないだろうか。また、異民族との戦争という切実なテーマを扱いつつ、全体にわたって表現が観念的で具体性に乏しいように思われる。樂府的な作品であるためということと同時に、若い頃に杜甫にならって詠じた習作であるためではないだろうか。

(橘)

一九九八年九月二十四日受理

畑村 学 宇部工業高等学校一般科講師
橘 英範 姫路獨協大学外国語学部講師